特集

暮らしのサリー

サリーを身につけたインド女性は美しく、優雅で魅力的である。それはあたかも女神のイメージを連想させる。

サリー。それは長い一枚の布であり、仕立てられた服ではない。しかしこの一枚の布が織りなす世界は実に奥が深い。

インドは一〇億を超える人口をもつ大国であり、人びとの生活スタイルも多様である。そのなかで、サリーはインドを代表する衣装としてインド全体に広まっている。またそれだけに、その素材も着方も、地域や階層などによって千差万別である。また、サリーは国境を越えて、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、さらには欧米などの在外インド人社会にも広がっている。

本特集では、九月八日から開催される特別展「インド サリーの世界」にちなみ、とくに暮らしのなかに生きているサリーについて、さまざまな角度からとらえてみたい。

華やかなサリーとシャルワール・カミーズに身を包む女性たち（コルカタ市）

サリーがいのち

杉本 良男（すぎもと よしお） 先端人類科学研究部

インドの女性とうちとけようとするならば、ともかくサリーの話をすればよい。わたしサリーには目がないのよ、とひざを乗りだしてくる人がほとんどだ。あまり関係がなさそうな顔をしていても、じつは衣装もちだったりする。ともかくインド女性のサリーへの関心は強い。そして、サリーは自分がインド女性である、という意識をもたせる衣装でもある。ただ、インドもグローバル化と経済自由化の波をうけてライフスタイルが大きく変わり、サリー以外のファッションも目につくようになっている。

サリー（正確にはサーリーに近い）は基本的に成人の女性が着るものである。少し前までは、未成年のための簡易型のハーフ・サリーが学校の制服にもなっていたこともある。しかし、ここ二〇年ほどのあいだに、若い女性のファッションはパキスタンで広く着られている、シャルワール・カミーズ（いわゆるパンジャービー・ドレス）にとってかわられた。シャルワール・カミーズは、丈の長い上衣（カミーズ）と、ゆったりしたパンツ（シャルワール）を合わせたもので、結婚前の女性に広く普及し、大学のおしゃれな学生の制服のようになった。その層がそのままもち上がって上の世代にも広まったのである。さらに外国の影響でジーンズも人気があり、カミーズの下にジーンズをあわせるファッションも見られるようになってきた。このようにインドではしだいにサリー離れがおこっているが、さりとてサリーへの関心はやむことはない。

ところで、サリーは縫製した服ではなく、基本的に一枚の布である。幅約一・二メートル、長さ六ヤード（五・四メートル）が標準であるが、階層、地域などによってサイズにも違いがある。素材は、シルクの手織りのものが上等で、コットン、化繊のもの、機械織り、プリントものは庶民的である。化繊のサリーは洗濯をしても暑い時期にはあっというまに乾くので重宝される。とくに日本製の化繊のサリーはプリントが美しいので、インド人にも人気がある。

同じインドでも、南インドはとくにサリーへの執着が強いようである。チェンナイ市の繁華街、ティー・ナガルでは、老舗も新興もとわず高級サリー店の出店ラッシュ、大型ビルの新築競争がつづいて、サリー離れどこ吹く風といった風情である。もちろんいわゆる街のバザールにもサリーをところせましと並べて売っている店がある。当然そこでは客と店主のあいだで熾烈な値切り合戦もおこなわれる。

その一方で、高級店は低い台にサリーをおき、座って選んでもらえる、呉服屋を思わせるようなつくりにしているところや、デパート風にやや高いケースの上に並べているところもある。結婚式や祭礼のときなどに、サリーを大量に贈与する習慣があるところでは、客が押し寄せて殺気だった雰囲気になる。店のあちらこちらで、何十枚ものサリーを広げて延々と品定めがおこなわれている。しかしいったんシーズンがすぎると、安売りがはじまるので、その機会を狙って掘り出し物をさがそうとする人もある。

基本的に一枚の長い布であるサリーは、下半身に巻きつける「ボディ」、その両端を飾る「ボーダー」、最後に肩からからだの前または後ろに垂らす「エンドピース（パッルー）」の大きく三つの部分からなる。とくに、パッルーの部分には豪華絢爛たるデザインが織られていたり、また有名デザイナーの作品になると、刺繍やミラーワーク、メタルワークなどを駆使して豪華さが演出されている場合も多い。

サリーは、ブラウスとペチコートをつけた上に巻きつけて着るのが基本だが、着方もまた地方や階層によって千差万別である。ブラウスはサリーと同系色であつらえるのが普通である。サリー地にブラウス地が連続して織りこまれているものもあるが、そうでなければ、ブラウス

サリー店の内部（チェンナイ市）

手仕事を現代ファッションに生かす（デリー市）

サリーの贈り物

三尾 稔（みお みのる） 民族社会研究部

インドでは、布や衣類は贈り物としても非常に重要である。ヒンドゥー女性の人生最大の儀礼とされる結婚のときも、衣類が盛大に交換される。このとき、その主役になるのはサリーである。多様性のあるインドのこと、贈与の内容には地域や階層によってさまざまな変異がある。ここでは筆者がフィールドワークをおこなっているインド西部、ラージャスターン州の都市に住む女性の例に沿って、贈り物としてのサリーの姿を具体的に見てみよう。

街のブラウス地屋（チェンナイ市）

ご登場願うのは、ウダイプル市に住むKさんである。大学講師の彼女はこれも大学講師である夫と幼稚園に通う娘、二歳になる息子とともに公務員住宅に暮らす。給料は一般の中間管理職よりやや安いが、共稼ぎで倹約上手な夫妻は近々郊外に家を建てる計画だ。州都ジャイプルに住む実父は州の高級公務員。インドではまずまず裕福な家庭といえるだろう。

Kさん夫妻と実家の父母

Kさんが公の場で初めてサリーを着たのは、大学の卒業パーティのときだった。これはラージャスターンのこの階層の女性の間ではごく普通で、もっと若い娘時代はレーンガー（スカート）とブラウス、オードニー（上半身にまとう布）姿が一般的だ。「サリー・デビュー」では彼女もご他聞にもれず、母のサリーを着た。母は娘が成長すると娘用のサリーを買いためし、ひとり立ちに際してサリーを贈る。大学院の修士修了後に就職したKさんに母は二一着のサリーを贈っている（一、五、七、一一、二一などは縁起のよい数字とされる）。

大学講師として働きだすとすぐに花婿探しが始まった。親戚や知り合いを通じて経済環境や学歴などで釣り合いのとれる同一カーストの男性が求められ、結婚が決まったのは就職して二年後だった。結婚が決まると花嫁側、花婿側双方の親族間、また花嫁側と花婿側のあいだで膨大な量の衣類が贈ったり贈られたりする。贈り物に関係するそれぞれの家庭は、なじみの服屋でサリーや衣類を買い付け、どれを誰に贈るのかを家族で延々と相談する。

結婚のときにKさんに贈られた衣類を書きだしてみると次のようになる。まず両親から二一着のサリー（そのうち一セットはレーンガーとオードニー）、母の実家から一一着のサリー（一セットはレーンガーとオードニー）、父方の親族の既婚のいとこから一人につき一着ずつのサリー、母の兄弟（Kさんの母方オジにあたる）から特別なサリー（マーマー・チュンルリー）を一着ずつ、さらに花婿側から婚約式と結婚式の計二回、サリー、レーンガーとオードニーを一着ずつ（それにアクセサリー一式も二回贈られる）。Kさんの両親は婚約式や結婚式には自らの親族にも花婿側の親族にも男性には洋風のスーツ、女性にはサリーをそれぞれ最低でも一着ずつ贈っている。

これらの贈り物は、ほとんど「義務」といっていい。つまり、花嫁に対して今記したような関係にある人は誰でもこれらの衣類を贈ることが当然視されているのである。Kさんのように比較的裕福な一族ではない場合でも、サリーの枚数が少なかったり質が落ちたりしたとしても、親族関係がある限りサリーは必ず贈らなければならない。逆にもっと裕福でよい品を数多く贈れればそれに越したことはないが、サリーや衣類に代えてほかのものを贈るということはありえない。もちろん衣類以外の贈り物もあるが、衣類が贈られない限りは結婚の贈り物が終わったとは誰も考えないのである。逆に、親族でない者が衣類を贈るというのはどうだろうか。Kさんの家族に聞いてみると、それもありえないことだという。結婚時のサリーその他の衣類の贈与は親族同様の交際を意味する。親族には相応の相互扶助やつき合いがともなう以上、親族外の衣類の贈与のやりとりはほとんど考えられないことだというのである。

一方、特定の親族関係にある人が「義務的」に特別な贈与をすることを期待されているという場合もある。それは花嫁の母方オジ（ヒンディー語ではマーマーという）にあたる人からのサリーである。一般に北インドの社会では「マーマー」は自分の甥や姪を物心両面で保護し援助する役割をもつ。結婚のときに「マーマー」が贈るサリーは特に品質のよい赤のサリーと決まっていて、マーマー・チュンルリーという特別な用語でよばれる。結婚式のなかでもとくに重要な儀式のときに花嫁がまとうのはこのサリーである。流行に敏感な上流階級の結婚式では多彩な色やデザインのサリーが着られるようになっているが、それでもこのルールだけは守られる。マーマー・チュンルリーはたとえ着なくとも、ほかのサリーの上からはおるのだ。このサリーは「マーマー」が姪に対してもつ義務を象徴し、省略不可能なのである。

同様に、子どもの出産後のケガレをとり除き、母と新生児が通常の世間の生活に戻る儀式（スーラジ・プージュナー）では、新生児の母の実家から贈られる、黄色かオレンジの地に赤の縁取りがされたサリーを必ず着ることになっている。このサリーの色自体にケガレをとり除く力があると信じられていると同時に、この贈り物は実家と婚出した女性やその子との持続的な関係を象徴するという意味がこめられている。

二児の母となり、大学講師として社会的にも活躍するKさんはいまやサリーを贈られるだけではなく、機会あるごとに贈るようになっている。たとえば息子の剃髪儀礼（誕生後一年から五年のあいだに、子の無事な成長を祈って髪をそる儀式をおこなう）のときには、夫方の親族や自分の男性親族の妻のうち自分より年少の者すべてに衣類やサリーを贈っているし、年に一度のラクシャー・バンダンという祭礼のときには夫の姉妹すべてにサリーを贈る。

サリーは単に着るだけではなく、いろいろな願いをこめて贈る大事な財だ。Kさんの例からも明らかなように、サリーの贈与はさまざまな社会関係を確認しあい、また社会関係をつくり上げる重要な機会になっている。Kさんの成長の節目ごとにサリーは現れて大切な関係をとり結ぶ。サリーはインドの社会関係をあざやかに織りなす衣なのである。

農村の結婚式。ホーマ（護摩）のまわりを新郎新婦がめぐる儀礼。新婦は母方オジから贈られた深紅の衣装で身を包んでいる

ブラーマン（バラモン）のウパナヤナ（成人）儀礼のときに、親族から大量に贈られた衣類やパグリー（ターバン）の布。台車に積まれ、ご近所の住民にお披露目される

地売り場や、街のブラウス地屋さんへいってサリーにあう色目のものを買う。その色目の多さ、えらぶ店員の眼力の見事さにはいつも感心させられる。これを仕立屋さんにもっていって採寸し、仕立ててもらう。なにごとも細かく分業になっているのが、インドのビジネスの特徴である。

大きな行事のときに着る高級品だけでなく、サリーは普段着や労働着としてもつかわれる。女性労働者がサリー姿で建材などを運んでいる風景はめずらしいことではない。また、端の部分が固定されずに垂れているので、さっとテープルをふいたり、洟をかんだり、お金やお菓子などをちょっと包むのに使ったり、と用途は多様である。ときには、列車のなかで、サリーをハンモックのようにして、子どもを寝かせる風景も見られる。

サリーはインド女性の代名詞のような衣装であるが、インド全体に普及したのはそれほど古いことではない。一九世紀後半に、ムンバイのパールシー（ゾロアスター）教徒や、ノーベル賞作家タゴールの一族がサリーを広める役割をはたし、また画家ラヴィ・ヴァルマーの絵や、映画などの大衆メディアを通じてそれが人びとにアピールした結果、普及するようになった。インド独立後はサリーをナショナル・ドレスに、というキャンペーンもはられ、すっかり定着した感があったが、パキスタンで広く着られているシャルワール・カミーズへ若者から傾いていったのは興味深い現象である。

近年は、コンピュータを駆使した斬新なデザインのサリーがあらわれてきているが、それを実現するのは伝統的な手織りの職人である。この古さと新しさが同居しているところが、インドのインドたるゆえんである。

農村での結婚の際に、新郎側から新婦に贈られた衣装と装飾品

神さまの衣装道楽——奉納されるサリー

杉本 星子（すぎもと せいこ） 京都文教大学教授

南インドのヒンドゥー寺院の新築儀礼は、何日にもわたっておこなわれる。クライマックスは、寺院の本殿の真上にあたる屋根の上に据えられた壺に祭司が聖水を注ぎ、地上に集まった信者たちが天上から降り注ぐその聖水を浴びて神さまの御利益をいただく大灌頂儀礼（マハー・クンバービシェーハム）である。その前夜、バナナの木や美しい花々で華やかに飾られた祭壇のまえで、夜通し聖火（ホーマ）が焚かれている。祭司が聖火壇に香木を投げ込みながら、祝詞（マントラ）を唱え続ける。深夜の闇と静寂のなかで、寺院の灯りだけが煌々と輝き、祭司たちが経文を唱和する声だけが響く。

夜半ごろ、燃えさかる聖火に高価なシルクのサリーが投げ込まれる。上から油（ギー）が注がれる。聖火壇のなかで、真っ赤なサリーがメラメラと炎をあげて燃えあがる。女神へのサリーの奉納である。シルクという清浄な素材で織られ、かつ縫い目がない清らかな衣服であるサリーを媒介として、人びとと神さまが結びつく瞬間である。

どうやら美しいサリーが好きなのは、人も神さまも同じらしい。しかもインドの神さまは、けっこう衣装もちである。自然石に目を描いただけの村の女神にも、黄色のサリーが着せかけられている。村の女神はひとり者だが、村祭りは女神の結婚儀礼でもある。祭りの日、村の祭司は女神に入念にお化粧をほどこし、ふだんは金庫に大切にしまわれている宝石の首飾りをつけ、花で飾り、鮮やかな赤いサリーを着せつける。

富と豊の女神ラクシュミーに奉げる儀礼をおこなうため村の寺院に集まった女性たち（タミルナードゥ州）

寺院の新築儀礼で聖火を焚きマントラをとなえる祭司（タミルナードゥ州）

大寺院の祭司は、毎朝、寝室に神さまをお迎えに行き、お召し替えをさせ、食事を捧げ、奥にのせて、信者たちが待つ本殿にお連れする。日に何度かおこなわれる灌頂儀礼（クンバービシェーハム）では、聖水、ミルク、ターメリック、蜂蜜、ヨーグルトなどでご神体を清める。そのあとカーテンがひかれ、ご神体が隠される。信者たちはカーテンの前にどっかりと座り込んで、おしゃべりをしながらひたすら待つ。しばらくしてカーテンが開くと、美しい衣装を身につけ花や宝石で飾られた神さまが現れる。人びとはその神々しいお姿をひと目でも見ようと、首を伸ばし両手を合わせ高く頭上に挙げて拝みながら押し合いへし合いするのである。神さまは、ときには王さまの姿をしたり、子どもや行者の姿をして現れることもある。神さまのコスプレといったら、間が当たるだろうか。

神さまにお願い事をするときには、ココナツやバナナ、花、ライムの実、ビンロウなどをお供えする。大切な誓願をするときにはサリーを奉納する。そのせいもあってか、大きな寺院の周りには、昔からたくさんの織工が住んでいる。寺院では年に一度、奉納された大量のサリーのオークションがおこなわれる。なんといっても、神さまの御利益あるお下がりのサリーである。オークションの収益は大きな寺院収入となる。現在、タミルナードゥ州の大寺院は政府の管轄下に入っている。神さまのサリーは、どうやら州政府にも多大な御利益を与えているようである。

神々への織物の奉納、職工組合の額絵（カルナータカ州）

サリーの好みとカースト——西インド

松尾 瑞穂（まつお みずほ） 総合研究大学院大学文化科学研究科

インド社会が多様な社会集団から成り立っていることはよく知られている。カースト、言語、宗教、社会階層などの差異は、その人の外見や身のこなし、話し方から容易に推測でき、人びとが日常的に身にまとうサリーにも反映されることがある。たとえば、西インド・マハーラシュトラ州のブネーを見てみよう。

州全体では、一七世紀に勃興したマラータ王国を担ったマラータが、人口でも圧倒的に多く、政治分野では支配的である。しかしブネーでは、ベシュワ（宰相）であったブラーマン（バラモン）が王家に代わり実権を握って君臨したため、サンスクリット文化が花開いた場所となった。このような歴史的背景によって、ブネーでは、数あるカースト集団のなかでも、特にブラーマンとマラータとの対比がより鮮明に見受けられる。

ブネーのブラーマン女性にとっての晴れ着は何を置いてもパイタニー・サリーである。肩にかかるパッルーには、マンゴー柄とクジャク柄の二種類があり、どちらもすべて手織りで完成までに約一カ月半を要する。そのため値段もやや高めで、パッルーの柄の大きさによって三〇〇〇から一万ルピー（約七五〇〇円～二万五〇〇〇円）が相場である。ブラーマン女性にとっては、結婚式、息子のムンジャ（聖紐式）などのめでたい行事にこれさえ着ておけば安心、というものであるが、その分、知人の結婚式に出たら自分と同じパイタニーを着た人が何人もいてうんざりした、という経験も少なくない。

一方、農村に住むマラータ女性の大半は、茶色や濃緑色の格子柄の生地でブラウスをつくり、どのサリーにもそれを合わせて着る。色の組み合わせを気にしないので、結果としてかなり派手になる。

誤解を恐れずに言えば、このマラータとブラーマンの違いは、大阪人と京都人のそれに近いのではないかと思う。マラータはサリーの色も柄も、ぱっと目を引く鮮やかなものを好む。装飾品も大振りで、既婚者の印であるネックレス（マンガラ・スートラ）は胸の下まで長くたらし、金が二重になった装飾を施してあるものが多い。だから金の装飾品が欲しいときには、マラータ女性に聞けば買いなれているだろうから間違いない、などといわれる。

ブラーマンはというと、小柄模様で明るい色のサリーを好み、マンガラ・スートラもごく細いチェーン状のものをさりげなくつける。質実剛健で教育熱心なブラーマンは、医師や弁護士などの専門職を輩出し、「きちんとしている」ということを最重視する、さながらブネー社会のピューリタンのような存在である。マラータ王国で育まれたマラーティ文化の体現者としての自負は高く、自らの話し言葉こそが「ピュア・マラーティ」であると言ってはばからない。そのような態度や生活様式はときに他集団から「チックウ・ブネーカル」（＝けちなブネー人）と揶揄され、「お高くとまった人たち」と見なされることがある。

逆に、マラータ女性が着ている派手なサリーや大ぶりの装飾品をみて、ブラーマン女性は「やっぱりマラータねえ。あんなに誇示しなくても」とささやく。このように、それぞれの好みや趣味もカーストの特徴と結び付けられて理解されることがある。私などは、これいいなと思うサリーがあっても、同行してくれたブラーマンの友人に「マラータっぽい」と言われて買いそびれることもある。こうなると、買い物の付き添いの人選もなかなか難しいのである。

ブラーマンの婚約式。花嫁は結婚式とあわせて最低5～6枚のサリーを用意する。金ボーダーの太さがフォーマル度を高める

パイタニーのパッルーは、産地によってマンゴー柄とクジャク柄がある

どのような装飾品をあわせるのかによっても、カーストの違いが現れる

貧困のなかのサリー——北インド

菅野 美佐子（かんの みさこ） 総合研究大学院大学文化科学研究科

私がフィールドワークでインドに滞在していた二〇〇四年の四月に、北インド最大の州、ウッタル・プラデーシュの州都であるラクナウという都市で、ある痛ましい事件が起こった。その月の末におこなわれる総選挙に向けて、ある政党がキャンペーンで貧しい女性たちに無料でサリーを配ることとなった。当日、会場には総勢一五〇〇〇人が集まったが、スタッフがサリーを配りだすと、押し寄せた女性たちが将棋倒しとなり、二二人もの命が奪われた。その多くは情報を聞きつけてやってきた、スラムなどに住む貧しい女性と子どもであった。なぜ女性たちはそれほどまでにサリーを手に入れたかったのだろうか。私が調査をしていた北インドの農村女性の暮らしから、理由を推測してみよう。

私は、この惨事が起きたラクナウから東に二五〇キロほど離れた、ある村に滞在していた。村の女性たちがもっているサリーの数は平均して二、三枚。村の外に出かけることができない女性たちは、自分でサリーを買えず、親族からもらったサリーを大事に着ている。毎日の沐浴のときに洗濯をするが、薄手のサリーであればあっという間に乾いてしまう。着替えの心配はないが、そのかわり裾がほころび、穴の開いたサリーを毎日着回すことになる。だから私がいつ村を訪ねようとも、彼女たちがパッラー（パッルー）で顔を覆っていようとも、おなじみのサリーのおかげでそれが誰なのかがすぐにわかる。青地に黄色の花模様のサリーはミナクシ、黄色地に赤いラインの入ったサリーはリーターという具合に。

乾期もピークを迎えたある日、村に行くと、ミナクシが「いつきたの」と泥まみれのサリーで出迎えてくれた。家の泥壁の塗り替え作業でもしていたのだろう。サリーは膝までたくし上げられ、そこからのぞく脛や黒く日に焼けた細い腕、パッラーに半分覆われた顔までも泥だらけである。

サリーというと、一枚の長い布をドレープをつくりながらきれいに体に巻き付けた優雅なイメージがある。しかし村用のサリーは短めで、ドレープをほとんどつくらない。パッラーも通常は肩の前側から後ろに垂らすが、体に巻く分の布を節約して後ろから前に垂らす。ミナクシのサリーもへその部分に折り込むプリーツなどない。くしゃっと束ねられただけで、腰で結ばれたペチコートのひもと腹のあいだに無造作に挟み込まれていた。プリーツなど気にしていたら仕事はできないのだ。

彼女たちにとって、お祭りや結婚式は唯一サリーが手に入るチャンスである。実家の兄や夫、姑が新しいサリーを買ってくれるかもしれないからだ。しかし、それも彼らの懐に余裕があるときだけ。もらえないことも多い。そのときはまた古いサリーを着るしかない。

村の外に出かけることなく一日中働いている女性たちにとっても、きれいなサリーは魅力的である。たまに村にやってくる保健ワーカーのきれいなサリーをうらやましく思うこともある。しかし、その日暮らしの彼女らにはサリーを買う余裕はない。

選挙キャンペーンでサリーを求めて押し寄せた女性たちは、きれいなサリーで町を行き交う女性たちを横目にしつつ、いつも同じサリーを着ているにちがいない。彼女たちにとって、新しいきれいなサリーを手に入れることは、大きな喜びだったのであろう。

ひと仕事終えて、家の陰でくつろぐ女性と子どもたち

家畜用に集めた飼葉を頭に乗せ帰路につく

女性たちもサリーが汚れるのをいとわず、下水用水路づくりに参加している

サリーのパッラーは肩から垂らすのではなく頭から被るのが村の女性の一般的な着こなし

サリーで花嫁さんごっこ——バングラデシュ

南出 和余（みなみで かずよ） 総合研究大学院大学文化科学研究科

結婚式の日、沐浴のあと兄嫁たちにサリーを着せられる花嫁（14歳）

花嫁さんごっこで着飾る子ども（10歳）

花嫁さんごっこでサリーに巻かれる女の子（5歳）

新郎から贈られてきたサリーやアクセサリーで着飾る花嫁の姿（15歳）

スーツケースで新郎側から届けられるサリー

結婚や祭りの際、家に新しいサリーが届くと、それは子どもたちのごっこ遊びの格好の材料となる。女の子たちは、新しいサリーで「花嫁さんごっこ」を始める。長さが五メートル以上もあるサリーは、子どもの体には断然大きすぎて、「子どもたちがサリーを着る」というよりも、「子どもたちがサリーに巻かれている」という有様だ。それでも彼女たちは、母に贈られたサリーを自らまとい、化粧をして「花嫁さん」を演じて遊ぶ。

普段着であるサリーが、ハレの日の「花嫁」の象徴として遊ばれるのには理由がある。バングラデシュ農村で暮らす彼女たちがサリーを日常的にまとうようになるのは、結婚後のことである。それまでは、サロワ・カミース（シャルワール・カミーズ）とよばれるワンピースの下に幅広のズボンをはいて、オールナと呼ばれる長いショールを肩からかけるのが一般的な服装だ。サロワ・カミースは一〇歳ごろから着るようになるが、それまではワンピースやちょうちんパンツをはいている。つまり、彼女たちの服装は、ワンピースからサロワ・カミース、そしてサリーへと変化するわけだが、ワンピースからサリーまでの道のりは、それほど遠くはない。

一四、一五歳、遅くとも一八歳ごろまでには大半の女性が親によって決められた結婚をするこの社会では、彼女たちはある日突然サリーを着る日を迎える。結婚式は新郎新婦双方の家においておこなわれるのが一般的で、ことに新婦側でおこなわれるお祝いは盛大である。花嫁は、結婚のための沐浴をし、新郎側から贈られる特別なサリーをまとい、化粧をして着飾る。この一連のプロセスを手伝うのは、しばしば兄嫁たちだ。

結婚の際には、結婚式用の特別なサリーのほかにも、普段着用の数枚のサリーや、アクセサリー、化粧道具一式が贈られる。最近ではそれらはスーツケースに入れて届けられる。新郎側からスーツケースが届くと、大人も子どもいっせいに群がる。スーツケースのなかには、花嫁のためのサリーのほか、母や祖母たちへのサリーも入っている。さらに両婚家では、祝儀のサリーが親戚中に贈られる。結婚を機に多くのサリーが行き交う。そうして家に贈られてきたサリーが、子どもたちの「花嫁さんごっこ」の道具となるのだ。子どもたちは、嫁ぎゆく姉のサリー姿を目にし、そして、自分も真似事をする。

まだ心の準備もないままに結婚する彼女たちだが、数日後に嫁ぎ先から初めての里帰りをするときには、晴れやかな顔で、しっかりとサリーをまとって帰ってくる。何度も練習してようやく自分で着られるようになり、それでもサリーでの生活に身動きのとりづらさを感じる私には、結婚を境にサロワ・カミースから平然とサリーをまとうようになる彼女たちの変身ぶりを、敬意の眼差しで見ていたが、その背景には、彼女たちの幼いころの「花嫁さんごっこ」があるのだろう。

憧れの女優ファッション——フィジー

村田 晶子（むらた あきこ）　総合研究大学院大学文化科学研究科

結婚式前夜。生バンドの演奏でダンスに興じる小学生

婚姻儀礼を終えたばかりの新婦。赤いサリーは花嫁のしるし

新郎の到着を待つ新婦

南太平洋の島国であるフィジーには、インドからおもに契約労働者として来島した移民の子孫が暮らしている。その人口は約三三万人、総人口の約四〇パーセントを占めている。町にはインド系の人びとが経営するサリー店や貴金属店が軒を並べ、その光景は「南太平洋の小インド」ともいえる雰囲気を醸し出している。しかし、サリー姿で町を行く女性は、少なくなりつつある。

砂糖キビ栽培農家の娘である二〇歳のサロジは、町の会社に勤めている。毎朝、スカートにブラウスなどの装いで出勤し、週末に出かけるときには、ジーンズにTシャツと、西洋の若者と違わない装いを好む。彼女がサリーを着るのは、ヒンドゥー教の祭りであるディーワーリーや親族の結婚式など、年に二、三回に過ぎない。ところが、こんな彼女もサリーへの思いは依然として強く、「サリーを着る！」というときには、サリーやアクセサリー類を物色して、町中を右往左往する。彼女の思いの源のひとつは、インド映画にあるようだ。彼女の部屋には、チラシなどに掲載されていたサリー姿の女優の切り抜きが、ここかしこに何枚も貼られている。その切り抜きを見ながら、「こんなサリーが欲しい。髪型もこんな具合にして」と、話していたのを記憶している。

揃いのサリーで南インド系文化団体の全国大会に参加した女性たち

祭りを終え、歌とともに帰途につく女性たち

インドの地を踏んだ経験もなく、インドを知る人の話を聞く機会もほとんどない。そして、マスコミでインドが取り上げられることも珍しい。そんな環境にあって、常に人びとにインドを提供しているのは映画であり、人びとにとってもっとも身近なインドは、映画で見るそれといっても過言ではない。音楽やダンスなど、映画が人びとに与える影響はさまざまであるが、やはり女性にとっては、豪華なサリーを身にまとい、華麗に登場する女優の存在が大きいようだ。女性たちは映画のなかの女優の姿に憧れを抱き、サリーを身にまとう女優こそが、彼女たちが求めるインド女性像になるのであろう。

あるとき、女性五人で、親子の情愛を描いた話題の映画を見に行った。映画館では涙していた彼女たちであったが、その後しばらくのあいだ、彼女たちの話題の中心はストーリーではなく、女優の美しさとサリーについてであった。

女性たちは、色や柄、生地の風合い、アクセサリーや髪型との調和、そして、着こなしなど、サリーの装いの手本を映画に求める。その結果か、サリーを着るときには力がこもり、まるで映画の一場面ともいえる光景が生まれる。

年齢による差はあるものの、サリー離れは否めない。しかし、たとえ一年に数回であっても、重要な祭事の折には、競ってサリーで身を飾る。

フィジーで、映画に描かれているインドを再現することは難しい。そんななかでも、再現可能なのが、サリーの装いなのかもしれない。そして、フィジーのインド系の人びとは、女性たちがサリーを身にまとい、集う光景に、インドを見るのであろう。

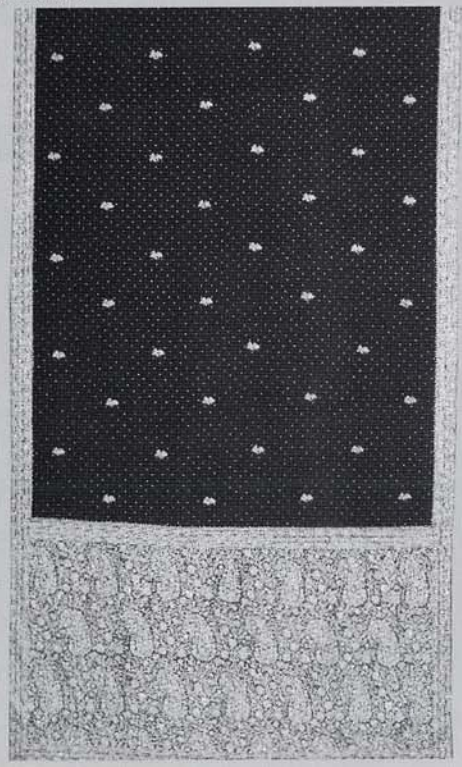
契約移民時代にプランテーションで撮られた写真には、サリーを着て労働に精を出す女性の姿が見られる。しかし、移民制度が廃止されてから八〇年以上が経過した現在、サリーは普段着や労働着として、単に身を覆う被服というものではなくなった。そればかりか、フィジーという、今を生きる彼女らの定住の地において、サリーは「憧れのインド女性」が体現できる衣装であり、「華やかなインド」が再現できる重要な舞台装置のひとつになっているのかもしれない。

表紙モノ語り

トップ・デザイナーのサリー

特別展「インド サリーの世界」出展作品（標本番号H0228432）　デザイン／リトゥ・クマール　幅116.5cm　長さ532cm

杉本 良男
先端人類科学研究部



リトゥ・クマールは、一九六〇年代からインド・ファッション界をリードしてきたデザイナーで、その名声は世界的に広まっている。最近のインドの週刊誌『アウトルック』の特集号で、現代インドのナンバーワン・デザイナーに選ばれている。一九八〇年代末から、インド出身のデザイナーが世界に次々と進出しはじめたが、その先駆者として、いまも第一線で活躍しているトップ・デザイナーである。

リトゥ・クマールは、インド的なモチーフを重視し、とくにマハラジャ家のファッションやインド西部の民族衣装からインスピレーションを得て、エスニック趣味の現代ファッションを生みだしている。六〇年代から、ザルドジとよばれる金糸刺繍を取り入れたサリーや、ガーグラー、レーンガーとよばれるスカートなどをつくりはじめた。その後も、東西の趣味を融合したいわゆるインド・ウエスタン風のファッションを世におくりだし、次世代のデザイナーたちに決定的な影響を与えてきた。

ここにとりあげたサリーも、薄手のクレープ地に銀糸刺繍などを配した豪華なものである。写真はその一部をクローズアップしたものだが、インドからヨーロッパにわたって世界に広まったペイズリー柄が印象的である。ペイズリーは、インドのカシミア・ショールが一九世紀なかばにヨーロッパで注目され、イギリスのペイズリー村で模造品がつくられたことで世界に広まったといわれている。